

聖書:エレミヤ書52章1～16、31～34節

説教:神殿が壊される

はじめに

エレミヤ書を駆け足で見えてきて、今日は最後の箇所になります。エレミヤが預言者として召されたとき、すでに北王国イスラエルはアッシリアによって滅ぼされています。エレミヤは、主に立ち返らないままなら北王国と同じように、ユダ王国もバビロンの手で滅ぼされていく、だから今すぐ立ち返りなさい。そうしたら主は思い直されて、あなたがたを救ってくださると語ります。ところが人々はエレミヤが語ることばに耳を傾けず、井戸に投げ込んで拷問を加える。そういう扱いをしました。それで結局、ユダ王国はどうなったのか。前半の部分にはユダ王国第20代のゼデキヤ王の身に起きたこと、後半の所には順序は逆になるようですがおなじくユダ王国19代のエホヤキンの身に起きたことがそれぞれ書かれています。読んでおわかりのとおり、ゼデキヤは厳しい処置がなされ、いっぽうエホヤキンの方は確かに補囚の身になってはいくのですが、晩年は牢獄から解放されて非常に丁寧な扱いを受けるようになる。だれもが疑問に思うでしょう。この二人の違いはどこから来るのだろう。私たちに主が語ってくださるメッセージに耳を傾けながら、そのことを考えてまいりたいと思います。

1 第20代ゼデキヤ王：悪いいちじく

1) 主の目に悪であることを行つた

2, 3節を読みます。「彼は、すべてエホヤキムがしたように、主の目に悪であることを行つた。実に、エルサレムとユダが主の前から投げ捨てられるに至つたのは、主の怒りによるものであつた。その後、ゼデキヤはバビロンの王に反逆した。」

名前が似ているので紛らわしいのですが、エホヤキムは第18代の王で、第19代の王がエホヤキンです。第18代のエホヤキムは、エレミヤが書いた神のことばを暖炉にくべて燃やしてしまった人です。これ一つ見ただけで、エホヤキムがどんな王であるかわかるでしょう。ゼデキヤ王はそんなエホヤキム王と比べられるほど主の目に悪であることを行つたと言われています。もちろん、神はそんなゼデキヤのことは見過ごす方ではありません。

以前エレミヤ書24章を開いたときにこのような話をしました。エレミヤの前には良いいちじくと

悪いいちじくが置かれています。主は、そのうちの悪いいちじくを指してこう言われていたのです。24章8, 10節。「悪くて食べられないあの悪いいちじくのように――まことに主は言われる――わたしはユダの王ゼデキヤと、その高官たち、エルサレムの残りの者と、この地に残されている者、およびエジプトの地に住んでいる者を、このようにする。わたしは彼らのうちに、剣と飢饉と疫病を送り、彼らとその先祖に与えた地から彼らを滅ぼし尽くす。」

それでどうなったか。エルサレムがバビロンに包囲されると城壁の門を閉じて中に閉じこもり、蓄えていた食糧でなんとか持ちこたえるしかない。やがて食糧はやがて尽きていき、飢饉が襲ってくる。体力が弱り、衛生状態も悪くなって疫病も蔓延する。そこでゼデキヤ王は、家族と主だった家来を連れて密かに城壁から逃れようと企む。けれども敵に見つかって捕らえられ、目の前で息子たちが殺され、ゼデキヤも目をつぶされ、足かせにつながれてバビロンに連れて行かれ、死ぬまでそういう状態に置かれる。主が語つたとおりになった。

2) さばき

エレミヤが語る主の警告を無視し続けた結果、悲惨な結末を迎えることになったのは、いつも言うようですが「自業自得」、だから私たちはゼデキヤのようにならないで、素直に主に従いましょうという話しで終わりそうです。ここはそういう話なのか。次に後半の所にあるエホヤキンのことを見ながら考えていきます。

2 第19代エホヤキン王（エコノヤ）：良いいちじく

1) 主の目に悪であることを行つた（第二列王記24章9節）

エホヤキン、またの名がエコノヤですが、彼は18歳で王となり、わずか三ヶ月間だけ王の位にあったそうです。三ヶ月という短い期間では、大したことができるはずがないのですが、第二列王記24章9節にこう書いてある。「彼は、すべて先祖たちがしたように、主の目に悪であることを行つた。」エホヤキンも先ほど見たゼデキヤも、同じ評価です。具体的な事は分かりませんが、「主の目

に悪であることを行った。」それでエホヤキンほどんな結末を迎えたのか。主の目に悪いことをしたのですから、当然ゼデキヤと同じように厳しいさばきを受けたらと予想する。ところが、そうではない。確かに、エホヤキンは補囚となってバビロンに連れて行かれ、三十七年間獄屋につながれてはいました。

2) 獄屋から解放される

しかしそれで終わりません。新しく即位したバビロンの王エビル・メロダクはエホヤキンを獄屋から呼び戻して自由の身にしたばかりでなく、高い地位につけ、王の前で食事を許され、生活費一切の面倒まで見てもらって破格の待遇を受けることになった。なぜそんなことになったのか、聖書には何も書いていない。よほどエビル・メロダクが優しい人だったのででしょうか。いや、聖書ですから、優しいとかそういう話をしようとしているのではない。ではなぜか。

先ほど二つのいちじくの話をしました。二つあったいちじくのうち、悪いいちじくはゼデキヤのことだと言いました。では良いいちじくとはどうしたか。主は、エホヤキンを良いいちじくであると見なす、そう語った。そう言われたのは、時期的に言えばエホヤキンの補囚となった直後のことで、まだこれからどうなるのかまったくわからないときです。24章5～7節。「わたしは、この場所からカルデア人の地に送ったユダの捕囚の民を、この良いいちじくのように、良いものであると見なそう。わたしは、彼らを幸せにしようと彼らに目をかける。彼らをこの地に帰らせ、建て直して、壊すことなく、植えて、引き抜くことはない。わたしは、わたしが主であることを知る心を彼らに与える。彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。彼らが心のすべてをもってわたしに立ち返るからである。」

主はエホヤキンを良いいちじくとみなすと言われました。なぜなら、彼らが心のすべてをもって主に立ち返るから。いっぽう、ゼデキヤや悪いいちじくとみなし、滅ぼし尽くすと言われました。なぜか。主に立ち返らなかつたから。聖書には、エホヤキンの主へ立ち返ったことは直接には書かれていません。しかし、主が語られたとおりになったことを見るなら、エホヤキンは立ち返ったということは間違いのないと思います。

3) イエスの系図 (マタイ1章12節)

エホヤキンのことでもう一つ考えておきたいことがあります。主は言われました。「彼らをこの地に帰らせ、建て直す。」そのことはどうなったか。実はエホヤキンがエルサレムに戻ったという記録はありません。おそらくバビロンで亡くなったようです。なんだ主の約束と違うと思ってはいけません。「彼らをこの地に帰らせ」とあります。「彼」ではなく、「彼ら」です。実は、BC.538年にエホヤキンの子どもたちがエルサレムに帰らした。どこでわかるか。マタイの福音書1章12節に、「バビロン捕囚の後、エコンヤ (エホヤキン) がシェアルティエルを生み」とあります。これでわかる。

そしてもう一つこの系図のことから考えたいことがある。エコンヤの名前がどうしてイエスの系図の中にあるのでしょうか。エコンヤは、ダビデのすえとして来られる救い主イエス・キリストの道を備えるために用いられていたということです。バビロンの王がたまたま優しい王さまだったので、破格の扱いを受けたという話ではないのです。主が、ひとり子である方を救い主として遣わしてくださるうとして、いろいろな障がいをとりのけながら、計画を進めていく。それがきょうの場面なのです。

たとえ人の目には信仰者としては大きな問題を抱えていても、主は諦めません。罪に対しては厳しいさばきをなさるけれども、いっぽうでは主に立ち返る心も与えてくださる。そうやって、なんとか私たちを救いたいと願って、最善のことをしてくださっている。

3 イエス・キリスト

1) 神殿崩壊

今日の箇所では、ゼデキヤのこととエホヤキンのことの間にはさまれるようにして神殿が壊されていく様子も描かれています。城壁は崩され、主の宮と王宮は火で焼かれ、主の宮からはソロモンが作らせた道具や柱が持ち出されてバビロンに運ばれていきました。この意味はなんだろうかと考えます。ユダの王たちがことごとく主に逆らい悪いことをしたので、そのさばきとして神殿が焼かれて崩壊していった。確かにそのとおりです。しかし神殿というのは、たんなる建物のことだけを指していたのではない。というのは、イエスは神殿は再建されて新しくなった建物を指してこう言われた場面があります。ヨハネ2章19, 21節。「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」「イエスのご自分のからだという神殿について語られたのであった。」

おわかりのように神殿はイエスのみからだを表しています。であれば、建物が焼かれて崩壊していったということはどういうことか。主のからだに傷ついていくのです。主が十字架でいのちをお捨てになることを表しているのではないですか。それも、宝物倉から徹底的に略奪されて後には何も残らない。それほどの壊され方です。

2) 人の罪を背負って痛みをともにする

エコンヤが補囚となり、続いてゼデキヤが補囚となり、南ユダ王国は完全に滅ぼされて、もはやどこにもアブラハムに語った約束の地が見えなくなり、人々が嘆き悲しみました。そのとき主はどうされたか。「わたしはなんども警告したのに主に立ち返ろうとしなかった、あなたがたの責任である。その報いである。」そう言って冷たく突き放したのか。そうではない。人々が嘆き悲しんでいたとき、主も一緒に痛みをともにされていた。いま神殿が壊されているけれど、今度は主イエス・キリストのみからだを十字架で献げていく。そうしてあなたがたに主に立ち返る心を与えて、救うのだ。主は、どこまでも私たちと寄り添おうとされています。そのような主とともにまた歩んでまいります。